○本号執筆者○

久後貴行	KUGO Takayuki	[大阪市立大学後期博士課程]
渡邊奈穂子	WATANABÉ Naöko	[大阪市立大学後期博士課程]
川口陽子	KAWAGUCHI Yôko	[神戸大学非常勤講師]
小栗栖等	OGURISU Hitoshi	[和歌山大学]
傳田久仁子	DENDA Kuniko	[大阪市立大学非常勤講師]
福島祥行	FUKUSHIMA Yoshiyuki	[大阪市立大学]
舟杉真一	FUNASUGI Shin-ichi	[京都外国語大学]
森本英夫	MORIMOTO Hidéo	[甲南女子大学]

●T.L.L.M.F. 第7号●

●発　行……1996年12月31日

●発行所…… 大阪市立大学大学院
文学研究科 TLLMF 研究会
〒558 大阪市住吉区杉本3－3－138
[06-605-2454]

●印　刷…… もず印刷

TRAVAUX DE LINGUISTIQUE ET LITTÉRATURE MÉDIÉVALE FRANÇAISES

第7号

目　次

1：久 後 貴 行●マッキントッシュ上での単語リストとコンコーダンスの作成

11：渡邊 奈穂子●非変形文法における非人称構文について

17：川 口 陽 子●マリー・ド・フランスの『レ』におけるamerという語に関する一考察 1

25：小 栗 栖 等●韻文版『聖ユスタッシュ伝』における固有名詞の格変化
—「韻文版」とラテン語原本の関係についての一試論—

33：傳田 久仁子●「超自然の存在」があらわれる時間(1)
—*Lais anonymes*、マリ・ド・フランス、クレチャン・ド・トロワのテクストから—

43：福 島 祥 行●CALL教室の課題と展望

55：舟 杉 真 一●tie, chの発音について

60：森 本 英 夫●Beauzéeの動詞時称体系

1996.12

韻文版『聖ユスタッシュ伝』における固有名詞の格変化

——「韻文版」とラテン語原本の関係についての一試論——

小栗栖　等

1. 本論の考察対象と目的

『聖ユスタッシュ伝』は多数の写本で今日に伝えられている。本稿が考察対象とするのはそのうちのただ一つ、*La Vie de Saint Eustache – poème français du XIIIe siècle* – (édition d'Holger Petersen, Champion, "C.F.M.A.", Paris, 1928)で刊行されたものである。この刊本に見られるユスタッシュの物語は、二つの写本、すなわち M 写本と G 写本で伝えられているが、底本となったのは M 写本の方である。考察に際しては、とくに興味を惹かれた場合にのみ、刊本の巻末に付された批判的注記(note critique)にしたがって、G 写本の異文(variante)も検討することにする。

さて、本論の考察目的は極めてささやかなものに過ぎない。それは、M 写本に見られる二つの固有名詞(Jhesus と Placidus)の格変化を網羅的に検討することである。M 写本では、この二つの固有名詞だけがラテン語文法に基いた格変化を行っており、それこそが我々の興味を惹いているのである。というのも、この格変化が文法的見地から見て正確なものかどうかということ、また、この格変化がどの程度原本となったラテン語版の影響のもとにあるかということは、場合によっては我々に一つの判断基準を与えてくれるからである。すなわち、唯一ラテン語版の影響だけによって格変化が行われているのであれば、「韻文版」がラテン語版に直接基いた俗語訳であることが、大きな蓋然性をもって推測されるであろう。一方、格変化の用法が誤謬に満ちあふれていた場合、我々は「韻文版」の作者のラテン語能力を疑わねばならない。つまり、彼は別の俗語訳に基く孫訳を作ったのにも拘わらず、固有名詞の一部を「ラテン語風に」変化させることで、自分の作品の出所を偽装したということが推測される。

ところで、「韻文版」の校訂者、ペテルサンは次のように述べている。

> 「我々の詩の直接の源泉は、モンブリティウスが刊行したラテン語版である[……]我々の作者は極めて忠実に原本に従っている。彼が何らかの重要でないディテイルを省略するにしても、それは僅かだし、そして何かをつけ加えるにしても、そうした付

け足しは物語の大筋には大きな影響を持たない。それはほんの僅かな箇所に導入された些細な変更に関しても同様である。」[1)]

我々は上のペテルサンの言葉を決して蔑ろにしようというわけではない。だが、一見して逐語訳とわかる「散文版」の場合なら、「ラテン語版から直接翻訳された」という断定も根拠なしに行うことができようが、「韻文版」に関しては、細かなデータなしに上のように言い切るのは危険である。ディテイルの省略や変更が数少なく、そして重大な影響を持たないことは誰しもが認めるにせよ、人によっては、「韻文版」に加えられたエピソードと描写の、数や影響力が小さくないと判断するかも知れないからである。とはいえ、ある程度のデーターを積み上げれば、ペテルサンが正しかったことは十分に証明され得ると我々は考えている。つまり、彼の主張こそが本論の仮説なのである。

以下では **Placidus** と **Jhesus** の格変化を形態毎に分類して分析し、その結果を、訳者の文法能力、次いで、原本との対応関係の観点から考察することにする[2)]。

2. テクスト分析

以下、カッコを付さない数字は「韻文版」の詩行番号、[ ]内の数字はラテン語原本の行番号(太字は節番号)である。()内では原本での対応語句の指示等を行う。また、(対応箇所なし)は訳語に対応する箇所が原本には存在しないことを意味するが、その後におおよそ原本のどの辺りに対応するのかを示しておいた。

PLACIDUS-PLACIDE-(PLACIDI)-PLACIDO-PLACIDUM-(PLACIDO)[3)]

主格形:主語もしくは主格属詞(表内*印)としてすべて正しく用いられている。
Placidus:38, 141, 149, 171, 189, 203, 212, 216, 225, 293, 345, 387, 405, 434, 437, 479, 714, 1095, 1273*, 1421, 1681*

・原文でも、同じ格で同じ語が用いられている場合:38 **[30-2]** (原文では **nomine** の従える主格属詞), 171 **[2-7]**, 189 **[2-7]**, 405 **[5-5]**, 479 **[7-1]**,
・原文でも同じ格だが、対応する語が省略されている、もしくは別の語で同じ人物が表されている場合:203 **[2-12]** , 212 **[2-12]**, 216 **[2-12]**, 225 **[3-1]**(原文では **magister militum**), 345 **[4-1]**(原文では **magister militum**), 387 **[5-1]**(原文では **magister militum**), 434 **[6-1]**, 437 **[6-2]**, **[25-9]**, 1421 **[25-11]**(原文では **magister militum** を先行詞とする **qui**)
・原文では異なった格になっている場合:293 **[3-7]**(原文では絶対奪格), 1273* **[23-12]**

(原文では *magister militum Placidas(sic)*となっているが、不定法句における目的格属詞である), 1681* [30-6](原文では不定法句の対格)
・対応する文章そのものがない場合:141 [2-3-4], 149 [2-3-4], 714 [12-8-12], 1095 [19-6-10]

呼格形:呼びかけとして正しく用いられている。
Placidé: 315, 363, 393
原文に対応する呼びかけのあるもの:315 [3-15], 363 [4-6]
ないもの:393

与格形:所有を表す用法で正しく用いられている。
Placido:1111 [19-12](原文でも与格形であるが、所有格ではなく、間接目的格として用いられている)

対格形:直接目的格補語もしくは前置詞 a の目的語(表内*)として正しく用いられている。
Placidum:313* [3-15](原文では advocans に対する直接目的補語としての対格形), 527 [7-10](原文でも直接目的格補語として用いられている), 1116 [19-12](原文では指示代名詞の対格形 eum)

奪格/対格形:前置詞 encontre の目的語として正しく/誤って用いられている。
Placidon:1383 [25-3](原文では指示代名詞の属格形 eius)

JHESUS[CRIST]-(JHESUS)-(JHESU)-(JHESUI)-JHESUM-JHESU[4)]

主格形:主語、主格属詞(表内*)として、一つの例外を除き、正しく用いられている。
Jesus: 365 * [4-6](原文でも主格属詞), 413 [5-7](原文では Dominus)
Jhesus: 11 (対応箇所なし), 321* [3-17](原文でも主格属詞), 497(対応箇所なし[7-1-6]), 597(原文では Dominus)[8-10] , 1361(対応箇所なし[24-10-12]), 2021 [38-10](原文でも主語となる主格形)
例外:a Jhesuscrist:1841(原文では直接目的格補語 Christrum) [35-6]

対格形:直接目的格補語として正しく用いられている。
Jhesum:1849(対応箇所なし。[35-8-10])
Jhesumcrist:547(対応箇所なし。[7-16-17]), 1722 [31-5](原文では間接目的格補語 Deo

salvatore Christo), 1901 (対応箇所なし[36-8-9])

奪格形:前置詞 de もしくは por (表内*)の目的語、分離の奪格として、一つの例外を除き、正しく用いられている。
Jhesu: 1866 [35-13] (原文では in Cristo)
Jhesucrist: 27* (対応箇所なし), 522 (対応箇所なし。[7-9-10]), 579 (対応箇所なし。[8-4-6])
・分離の用法で正しく用いられた奪格形態
Mes Jhesucrist trai a garant : 1699 [30-14] (原文では Dominus)
例外:奪格形が主語として用いられている。
Jhesucrist s'aparut Par le cerf : 1685 [30-7] (原文では salvator)

3. 格変化の正確さについて

前節で確認できるとおり、原文に対応する語が存在する場合はもちろんのこと、そうでない場合でも、格形態はほぼ正しく用いられている。それは前置詞の後においても変わらない。俗語の前置詞 a はラテン語の ad に語源を持つが、これは対格支配の前置詞であった。「韻文版」は正しく a Placidum (v. 313)としている。また、奪格支配の de から派生した de の後では、奪格支配の pro から派生した pour の後でと同様、きちんと奪格形(Jhesu, v. 1866;. Jhesucrist, v.27)が用いられている[9]。また、前置詞なしの場合にも奪格(Jhesucrist, v.1699)や与格(Placido, v. 1111)が正しく用いられている。それゆえ、「韻文版」の訳者がラテン語の格の形態と用法を十分に理解していたことは確かである。

とはいえむろん、彼は全く間違いを犯さなかったわけではない。第 1685 詩行では、奪格形 Jhesucrist が主語に用いられている。ミュレはこの詩行に関しては、G 写本のヴァリアントを示していない。つまり、その写本でも同じ形態が用いられているわけである。それゆえ、訳者が誤った可能性が高い。一方、前置詞 a の後で主格形を用い、a Jhesuscrist (v. 1841)としたことに関しては、訳者に責任を負わせることができるかどうかは不明である。G 写本は、M 写本の第 1836-44 詩行に対応する箇所を、全く異なった五詩行で埋めており、そこではイエス・キリストの名は言及されないからである。

さらに、訳者が誤ったのかどうかが曖昧な事例も存在している。すなわち、Placidus の項目の最後に挙げた奪格／対格形(v. 1383)である。この事例 Placidon は、encontre の目的語となっている。ところで、encontre は後期ラテン語の incontra に語源を持っているとされるが、この incontra なる語はあまり使用頻度が高くなかったのか、辞書には記載されてい

ない[6]。それゆえ、この語が如何なる格支配を持っていたのかは不明である。しかし、おそらく、この語は中世に入ってから in と contra を結びつけて作られたものであろう。in は対格と奪格を支配し、contra は対格だけを支配する。そして、in は対格を支配した場合、移動のニュアンスを持ち「～のなかへ、～に向かって」という意味になり、奪格を支配した場合は固定のニュアンスを持って「～のなかで、～の上で」という意味になる。それゆえ、encontre の意味から考えた場合、語源となった in も対格支配と考えることができる。たとえば、「韻文版」では、この語は«et va encontre Placidon»という風に、「を迎えに」という意味で用いられており、encontre が移動を含意するのは明らかだからである。とすれば、encontre もまた、対格を従えるのが適切だということになる。

では、Placidon は対格形なのか奪格形なのか。すなわち、「韻文版」の訳者は正しかったのか間違っていたのか[7]。確かなことは分からない。しかし、「韻文版」には与格形で Placido の形態が用いられている。Jhesus の第四格変化を知っている訳者が、第二格変化で与格と奪格が同形になることを知らなかったというのはあり得ない。それに、わざわざ Placidon なる奇妙な語形態で奪格を表さねばならない理由は何もない。一方、Placidon がギリシャ語源の固有名詞がとる対格形と同じ形なのは偶然であろうか。『聖ユスタッシュ伝』がもともとギリシャ語の物語を直訳したラテン語版によって西洋世界に広まったことを考慮すれば、あるいは、「韻文版」の訳者はギリシャ語の知識をひけらかしたのかも知れない[8]。むろん、それはあくまで想像である。しかし、いずれにせよ、この Placidon なる語形態とわずかに Jhesuschrist の-s-の脱落したという事実だけをもって、訳者のラテン語能力に疑義を唱えるのは正当ではあるまい。

4. ラテン語原本との対応

第二節のテクスト分析でも明らかな通り、「韻文版」はラテン語原本と対応しない部分を数多く有している。それゆえ、ここでの検討をもって、「韻文版」が直接ラテン語原本に基くかどうかを断定することは不可能である。とはいえ、それは最初から予想できたことである。というのも「韻文版」は大まかにはラテン語原本と対応関係をもつものの、細部ではかなり自由に物語を展開し、細かなエピソードや描写などを挿入しているからである。テクスト分析が非常に極端な結果――「韻文版」が原本と全く対応関係を持たずにでたらめな格変化を行っている、もしくは、原本とほぼ完全な対応関係を持つ格変化を行っている、というような結果――が引き出された場合にのみ、「韻文版」がラテン語原本に直接基くか否かについて我々は明確な判断を下すことができたのだが、テクストの現実がそうした理想状態を生み出すことは極めて希である。

しかしながら、「韻文版」に見られる固有名詞の格変化が、かなりの程度、原本の対応箇

所に一致しているというのは事実である。

たとえば、原文に対応するものがある場合だけに関して言えば、Placidus という主格形は全部で 17 回用いられているが、そのうち、14 回は原文でも同じ人物が主格におかれている。たしかに、そのうちの 9 事例に関しては、原文に Placidus という語が見られない。magister militum と言い換えられたり、省略されたりしている。だが、それはむしろ文体のレヴェルに属する問題である。ここで重要なのは、「韻文版」が原文と同じ構文法で物語を語ろうとしていることなのである。さらに、原文では対格形や奪格形におかれていた 3 事例にも注意を払わねばならない。これらが、「韻文版」で主格形になるのは、やむを得ないことである。というのも、ラテン語の「対格名詞+不定法」、「奪格現在分詞+奪格名詞」という構文法は、フランスでは「接続詞+主語+動詞」に対応するからである。一方、原文に対応するものがある Jhesuschrist の方は、4 事例あるが、格の点では全て原文に一致している。

斜格についても、「韻文版」はおおむねラテン語原本に基こうとしている。まず、Placidé という呼格に関しては異論の余地がない。原文に対応するもののない 1 事例を除けば、後の 2 事例は原文にも同様の呼びかけが見られる。また、対格形の Placidum の 3 事例、与格形 Placido の 1 事例は全て、原文の格形態を温存している。たしかに、用法の違いはある。第 313 詩行の Placidum と第 1111 詩行の Placido がそれである。これらの事例は原文の対応する語と形態の上では一致するが、文中で与えられた役割の上では異なっている。だが、それはラテン語と古フランス語の構文法の違いから生じた差異に過ぎない。

まず、原文では直接目的補語となっている対格形が、「韻文版」で前置詞 a の目的語となった事例については、原文の直接他動詞と同じ意味をもつ動詞が俗語では間接他動詞だったことに、そうした違いの原因を求めることができる。すなわち、ラテン語の原文の advocans Placidum([鹿を通じて]プラキドゥスに声をかける)に対して、「韻文版」では a Placidum le fait parler([鹿をして]プラキドゥスに話しかけさせる)となっているのである。一方、与格形の方は原文では間接目的語なのに、「韻文版」では所有を表しているが、これは多少複雑な経緯を経ている。この事例では、原文の minisitraverunt Placido(プラキドゥスに仕えた)が ierent Placido ami(プラキドゥスの友人であった)と言い換えられているのだが、実はその後に Et l'avoient lonc tens servi(そして彼に長らく仕えたのだった)という表現が続いている。つまり、「韻文版」の訳者は一つの原文に二つの訳文を対応させ、プラキドゥスの臣下が同時に彼の友人だったというディテイルをつけ加えたわけである。それによって、ラテン語と俗語の構文法の違いから生じる格形態の違いは可能な限り目立たないようにされている。固有名詞の格形態は原文のまま温存され、俗語の動詞(servir)が要求する直接目的補語は代名詞化されたのである。

とはいえ、上記のような形態の上だけでの格の温存はいつも行われたわけではない。それよりも、動詞の意味を正確に言い換える方が優先された場合もある。まず、先にも触れた Placidon は、対格形と奪格形のいずれであるにせよ、原文の eius(属格形)と食い違った格形態であるが、egressus ... in occursum ejus(彼との出会いのために出てきて)に対応する、俗語での一番自然な表現は、「韻文版」で用いられた aler encontre である。また、原文の与格形に対応させて、Jhesumchrist (v. 1722)という対格形が用いられたのも、dar gloriam(〜に栄光を与える=〜を讃える)に一番よく対応する意味をもつのが aorer だったからであろう。

結局、原文に対応するものがありながら、異なった格を用い、それが構文法から正当化されないのはただの1事例、第1699詩行の奪格形態Jhesucristだけである。usuque hodie servatit Dominus castitatem meam(今日この日まで、主は私の貞操をお守りくだすったのです)という原文を「韻文版」は Jhesucrist trai a garant...(私はイエスキリスト様からご加護を頂き...)と言い換えている。これを例えば、Jhesuscrist me fu garant(イエス・キリスト様が私の庇護者となって)としても、音韻の上でも音綴数の上でも問題はなかったであろうし、この表現の方が先の表現よりもずっとポピュラーである。だが、これは無謀な推測だろう。我々の乏しい知識では推し量ることのできない理由があったのかも知れない。いずれにせよ、「韻文版」の訳者がある程度、原本の格形態を尊重しているのは間違いない。

5. 結論

以上の考察から次のことがわかる。すなわち、「韻文版」の訳者はラテン語の格変化の形態と用法の知識を欠いていなかったし、また、原本の格形態をかなりの程度忠実に俗語に移入している。それゆえ、「韻文版」が直接ラテン語原本に基いて書かれた可能性はかなり高い。とはいえ、結論を急ぐべきではあるまい。この件に関しては、別の機会にさらに詳しく検討することにしよう[9]。

【 註 】

1) Cf. Holger Petersen, *Op. cit.*, p. XII
2) ラテン語原本は、*La Vie de Saint Eustace – Version en Prose française du XIIIe Siècle –*, édition de Jessie Murray, Champion, "C.F.M.A.", 1929 を参照した。この刊本は、本論中で触れた十三世紀の散文訳に対照させる形でラテン語原本を収録している。なお、本

論が「散文版」と呼んだのはこの刊本のテクストであり、先の条りは p. III から引用した。

3) 古典ラテン語の規則に従った格変化である。主格、呼格、属格、与格、対格、奪格の順に記した。分析も同じ順番で行う。なお、( )で括った変化形は我々のテクストには見られない。

4) 本来なら Jhesus *Cristus*, Jhesu *Cristi*, Jhesui *Cristo*, Jhesum *Cristum*, Jhesu *Christo* というふうに、Cristus の部分も Placidus タイプの格変化(第二格変)が必要であるが、「韻文版」は Jhesus の部分だけを変化させ、Crist は変化させていない。

5) Cf. *Nouveau Dictionnaire étymologique et historique*, Albert Dauzat, Jean Dubois, Henri Mitterand, Larousse, "Dictionnaire de la langue française", 1971

6) F. Gaffio, Lewis and Short, Menge - Güthling のラテン語辞典や *Oxford Latin Dictionary* にはもちろんのこと、以下の中世ラテン語の辞書にも記載が見られない。

・J. H. Baxter and Charles Johnson, *Medieval Latin Word-List from British and Irish Sources*, Oxford University Press, London, 1934

・R. E. Latham, *Revised Medieval Latin Word-List from British and Irish Sources* with Supplement, Oxford University Press, London, 1965 (Supplement 1980)

なお、前掲の語源辞典には encontre の項目がない。incontra にこの語の語源を求めているのは『ロベール仏和大事典』(小学館)である。

7) G 写本は Placidum という語形態を該当個所に用いている。しかし、我々の対象テクストを提供する M 写本の Placidon という語形態が写字生の写し間違いによって生じた可能性はない。というのも、Placidon は baron と韻を踏んでいるからである。G 写本でも次行では baron が用いられている以上、G 写本の Placidum の方が後代の修正の産物であることは明らかである。とはいえ、encontre が対格を支配するのが適切だという我々の推測は、この G 写本の写字生(あるいはその祖本の写字生)にも共有されているのである。

8) 八世紀初めにはすでにギリシャ語で書かれたユスタッシュの物語が存在していたようである。現存するラテン語版は十世紀に遡ぼるもので、ギリシャ語版を忠実に翻訳したものである。 Cf. Holger Petersen, *op. cit.*, p. XII. Jessie Murray, *op. cit.*, p. I

9) さらに詳しい検討については、次の論文を参照されたい。

『聖ユスタッシュ伝』の「散文版」と「韻文版」——十三世紀の二版について——、大阪市立大学フランス文学会発行、*LUTECE* 26 号掲載予定